

という言葉が生まれたのはいつ頃なのだろう、ということ。

そもそも、カメラが高額、高級品でプロしか入手できない時代に盗撮があるはずはないから、デジカメの登場を含めてカメラ、特に小型カメラが庶民の手に行きわたることが大前提。また、戦時中のように女性がモンペ姿の時に盗撮があるはずはなく、盗撮にはミニスカートの定着が不可欠。その他いろいろな社会的条件が揃わなければ盗撮という行為が成り立つはずがないから、盗撮やパンチラという概念は先進資本主義国特有のもの・・・？少なくとも、イスラム圏国家やいつもコートを着ている寒い国、逆にいつも裸同然でいるアフリカ諸国(?)では、盗撮やパンチラという概念はないはずだ。

ベルリン国際映画祭の参加国がどれくらいか、審査員はどの国の人かは知らないが、そもそも盗撮やパンチラは万国共通語？そうでないとしたら、それをテーマとした本作(実はテーマはそれではなく、再三セリフに登場するキーワードにすぎないが)はハンディキャップがあったのでは？そんな心配をものともせず、受賞できたのはめでたい限り。

美男美女3人が、なぜR - 15指定映画に？

この映画の主人公は、角田ユウ(西島隆弘) 沖島洋子(ヨーコ)(満島ひかり)、コイケ(安藤サクラ)の3人。私は全然知らなかったが、映画初出演、初主演となる西島隆弘はAAA(トリプルエー)のメインボーカルだし、満島ひかりもFolderのメンバーで平行してソロ活動も続けている、えらく可愛い女性歌手。また、安藤サクラは奥田瑛二の娘という血統書付きで、『罪とか罰とか』(09年)で私がかじめて見た女優。つまり、この3人はいずれ劣らぬ美男美女だから、本来ならば昨今日本で大はやりのイケメンと美女による純愛ドラマの方が似合うはずだ。

そもそも『愛のむきだし』というタイトルからして少しグロテスク？一体ナニをむきだすの？それは人間の本質。また本作がR - 15指定とされたのは、映画の中に盗撮、パンチラ、変態、勃起、レズビアンなどのキーワードが頻りに登場するから。そんなR - 15指定映画に、なぜ美男美女3人が出演したの？

これを機会にキリスト教の勉強を その1、懺悔

ユウが生まれた家庭はクリスチャン。映画の冒頭、要領よく「ボク」のナレーションで、ユウが生まれた家庭環境が説明される。日本ではクリスチャンは少ないから、まず父親が神父というユウの家庭環境を十分理解する必要がある。また、ユウが幼い時に亡くなった母親の、「いつか MARIA 様のような人を見つけなさい」という遺言(?)も大切なキーワード。だって高校生になったユウが盗撮行為をくり返している中で出会った MARIA 様がヨーコなのだから。

それはともかく、映画前半で大きな役割を果たすのが懺悔。3月7日から公開されたソビエト(グルジア)映画の『懺悔』(84年)はすばらしい映画だったが、本作では懺悔と

という言葉にそこまで深刻な意味はなく、キリスト教の一般用語における懺悔、つまり自分の罪（犯罪ではなく原罪）を神父に懺悔して、神の赦しを請うという行為だ。テツ（渡部篤郎）が自分の息子に毎晩懺悔を要求するようになったのは、突然テツの前に登場した愛人カオリ（渡辺真起子）と別れたショックによるものだから、ユウはえらいとぼっちりを受けたわけだが、現実には現実。さてユウは、父親としてではなく神父としてのテツに対して懺悔する罪をどこでどうやって探してくるの？

盗撮ってとっても楽しそう・・・？

ユウが女性の股間ばかりを狙う盗撮に励みだしたのは、神父の父親から毎日懺悔を要求されたため。つまり、自力で何らかの罪をつくり出さなければならなくなったところ、思いついたのが盗撮というわけだ。ところがやってみるとこれが意外と面白いし、奥が深い・・・？そのうち盗撮仲間もできたし、変態と呼ばれれば呼ばれるほど、それが快感に・・・？

しかしユウが心配したのは、いくら女性の股間を盗撮しても自分の股間が勃起しないこと。ひょっとして自分は性的不能者・・・？そんな心配をしながらユウは日々盗撮に励んだが、この映画の盗撮風景をみていると、盗撮ってとっても楽しそう・・・？

ヨーコとの出会いは女装から

俺って、ひょっとして男としてダメ？そんな心配をしていたユウが仲間との罰ゲームで負けたことがキッカケで挑んだのが女装。すると、これが意外にカッコよく、ユウのハマリ役に。黒い帽子をかぶりロングコートをカッコよく着こなすと、自分でもホレボレするほどだ。そんな女装姿の俺の名前は、サソリさん。

ユウが一目でマリア様と感じた運命の女性、沖島洋子ことヨーコとの出会いは、男たちに絡まれて闘っているヨーコを女装したサソリが助けたことによって生じたが、ここでヨーコもサソリに惚れてしまったから面白い。他方、女装していたユウは男たちを蹴りあげるヨーコのパンチラ姿を見てはじめて勃起。そして、男嫌だったヨーコもその夜はじめてサソリのことを思ってオナったから、こりゃ2人ともヘンタイ？しかし、ヘンタイで何が悪い！これが愛なのだ！

ヨーコがカオリの連れ子とは！

もともと優しく父親のテツの性格が一変したのは、テツが自由奔放で妖艶な女カオリと知り合い、その悪影響を受けたため。ヨーコとの運命的な出会いの数日後ユウは、そんなテツから突然カオリと再婚すると聞かされたからビックリ。「なぜよりによってあんな変な女と・・・？」とユウは思ったが、父親が決めたことだから仕方なし。

さらに驚いたのは、角田家に入ってきたカオリには連れ子がいたうえ、それがヨーコだったこと。それによってユウはヨーコの義理のお兄さんになったわけだが、サソリはヨー

コが大好き、ヨーコモサソリが大好きだが、妹のヨーコは変態の兄ユウが大嫌い！スクリーン上に描かれていくユウとヨーコのそんな奇妙な二人三脚の関係（？）は興味深い。

謎の女コイケの正体は？

ある日ユウとヨーコの通う学校に転校してきた女がコイケ。外見上は結構魅力的だが、実は彼女はゼロ教会という世間を騒がせている新興宗教団体の幹部。そしてゼロ教会はかつて存在していたオウム真理教みたいなカルト教団。コイケは次々と狂信的な信者を増やしている教祖サマの右腕だ。そのコイケが、ヨーコのお友達となって角田家に入り込んできたのはなぜ？さらに、自分がサソリだとウソをついて、ヨーコと「いい仲」になっていったのはなぜ？ゼロ教会の魔の手にかかって一家全員拉致されたという事件が報道されているが、角田家は大丈夫？テツもすぐにカオリの影響を受ける頼りない神父だから、ひょっとしてゼロ教会の洗脳攻勢の前に負けてしまうのでは？

コイケの企みを感じとっているユウは懸命の抵抗を続けたが、ある日家に帰ってみると、家の中はもぬけの殻。さてテツとカオリそしてヨーコは一体どこへ行ってしまったの？ひょっとして、ゼロ教会に拉致されてしまったの？

これを機会にキリスト教の勉強を その2、愛

本作はキリスト教の布教を目的としたものではないが、映画後半におけるヨーコの長セリフに注目したい。それは、新約聖書におけるコリントの信徒への手紙第13章だ。これは、愛について使徒パウロがコリント教会の共同体宛てに書いた手紙。つまり「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。愛は決して滅びない」のフレーズ。最近はやりの、教会での結婚式でその1部が使われているから、日本人もよく知っているはずだ。「愛がなければ私は何者でもない」から始まり、「それゆえ信仰と希望と愛、この3つはいつまでも残る。その中で最も大いなるものは愛である」で終わる新約聖書の長い言葉を、ヨーコが完璧に覚えていることにビックリ！

そんなことを考えれば、この映画のテーマが愛であることは明らかだが、それが「愛のむきだし」というショッキングなタイトルになったのはなぜ？それをよく考えたい。

後半の怒濤のストーリー展開は、あなた自身の目で

映画前半は、ホントは変態ではないのに変態だと誤解されているユウと、男はみんな変態だと誤解しているヨーコを軸とした、「 Hentai騒動」がテンポ良く描かれていく。したがって、思わず「こりゃ面白い！」と身を乗りだすこと必至。ところがゼロ教会とその幹部コイケが登場し角田家への露骨な攻勢が始まると、がぜん社会性と緊迫性を増してくる。

テツ、カオリ、ヨーコを洗脳し、その取り込みで成功したコイケは得意満面だが、映画後半はユウとゼロ教会あるいはコイケとのバトルを軸とした物語に変わっていく。

ユウが目指すのはゼロ教会本部に拉致されたヨーコの救出だが、完全に洗脳されてしまったヨーコは自分の意思で教会にとどまり奉仕しているのだから、その目を覚まして連れ戻すのは至難の業。しかも、そんな努力を続けていたユウ自身がゼロ教会の魔の手におちることになったから、さあ大変。ユウはヨーコをそしてテツとカオリをゼロ教会の手から取り戻すことができるのだろうか？映画後半はそれをテーマとした怒濤のストーリーが展開し、意外なクライマックスを迎えるから、そんな後半2時間は是非あなた自身の目で。

2009(平成21)年3月5日記

69



愛のむきだし

(第七芸術劇場で公開中)



©「愛のむきだし」フィルムパートナーズ

4時間大作鑑賞に挑戦せよ！

外国語映画賞初受賞！
日本中が滝田洋二郎監督のオスカー作「おくりびと」に沸騰中だが、その直前のベルリン国際映画祭でカリガリ賞と国際批評家連盟賞を受賞した園子温監督の問題作にも注目！

テーマは高校生のユウ(西島隆弘)とマリア様だと信じる純愛(満島ひかり)との純愛だが、盗撮、パンチラ、勃起などの過激語続出の

ためR-15指定。邦題も刺激的。一体何をむきだすの？それは人間の本性だ。

日本人には懺悔の習慣はないが、原罪・犯罪を問わず必ず罪を犯しているはず。神父の父親テツ(渡部篤郎)は愛人カオリ(渡辺真起子)と出会

異例の長さだが、後半のユウ救出のためのユウとゼロ教会との壮絶な闘いは見モノだ。さて二人の純愛の結果は？キリストは一人で十字架を背負ったが、本作では四人が背負う大きな十字架が印象的。さて、あなたの罪は？十字架は？そして、あなたの愛のむきだし方は？

変。ユウに対して毎日懺悔を強要した。そこでユウ考案の罪作り作戦が、

女性の股間を狙う盗撮行為がサソリと名乗ったユウの股間を見てはじめて勃起したのはなぜ？「ヨコがサソリに一目惚れし、はじめてオナったのはなぜ？」

盗撮風景満載のそんな型破りな物語は、カルト集団であるゼロ教会とコ

イケ(安藤サクラ)の登場によって、がぜん社会性と緊迫性を加速する。巧妙で執拗な勧誘により、今やテツ、カオリ、ヨーコは完全に洗脳。遂にユウも魔の手に落ちるが、愛がむきだすのは後半から。
キレル子どもたちの登場は飽食国家、自由放任無責任国家を作った大人の責任だが、ヨコやコイケの異様な性格形成の責任は誰に？そしてユウはいかにしてそれを克服？三時間五十七分は

大阪日日新聞 2009(平成21)年3月7日